

歴史事象の実践と検証の試み

—— 近世の検地の再現から ——

千葉 真由美*

(2023年10月23日受理)

Attempts to Practice and Verify Historical Events: Recreate Early Modern Land Surveying

Mayumi CHIBA

キーワード：歴史事象, 実践, 日本近世, 検地, 再現

本稿は茨城大学農学部国際フィールド農学センターにて行った検地の実践報告である。歴史事象の深い理解や教科横断的な取り組みにつなげるため、近世の検地を題材として2018年度より実践と考察を進めてきた。今回は検地の方法を記した史料、検地帳に記載された土地の数をもとに方法を再検討し、より広くより多くの土地をいかに早く検地できるかを実践によって検証することとした。

検地要具のうち、細見竹や梵天竹など一見すると目印にすぎないと思われた要具を有効に活用するため、これらの要具を目視により空間で確認して長方形を見立てるなど、実践に向けて大学構内で検討や確認を繰り返した。

実践当日は6つの地点を対象に、各地点を区画し、合計41区画の検地を実施した。各区画ではいずれも短時間で実施することができ、検地帳に記載された数が、実際の検地の数であることも想定され得るものとなった。さらに縦横の間数から導き出した面積の数値についても、おおよそ実測に近い数値を出すことができたといえる。実践者の感想からも、今回の実践が以前と比べて格段に進化した有意義なものであったこと、近世当時の検地のすがたに近づくことができたという手ごたえを得たことがわかる。

はじめに

歴史事象の深い理解や教科横断的な取り組みにつなげるため、近世の検地を題材として2018年度より実践と考察を進めてきた¹⁾。検地は土地の縦の長さや横の長さを計測して長方形の面積を算出するものであるため、どのような形状の土地であっても長方形に見立てる必要があり、長方形に見立てた際の土地と本来の土地の形状の過不足を正しく判断することが重要となる。これまでの実

*茨城大学教育学部

践では、長方形として比較的把握しやすい四角形の検地では実測値に近い数値を得ることができた一方、向かい合う辺が平行でない区画の土地は過不足を調整した長方形を想定することが難しく、検地の時間がかかりすぎてしまうなどの課題も残された。

そこで今回は検地方法を再検討した上で、より広くより多くの土地をいかに早く検地できるかを実践によって検証することとした。実践は2023年3月17日、場所は茨城大学農学部国際フィールド農学センターにて行ったものである。

当日あるいは準備等の実践者は、山口和泉（大学院2年次）、松本大輝・松浦大（大学院1年次）、高野啓介・宇野伶香・小林未知・鈴木孝明・生井雅久（以上、学部4年次）、井能渉、佐々木秀丸、寺本ゆうな、中泉佳歩、箕輪知夏（以上、学部3年次）、大塚涼馬、篠崎亮介、坪佑翼、濱野寛之、吉田新（以上、学部2年次）の合計18名である（いずれも2023年3月時点）。

1. 検地実施についての史料

(1) 検地の方法

検地の方法については『徳川幕府県治要略』掲載「検地之図 各筆検地ノ分」²⁾のほか、近世に描かれたいくつかの図によっておおよその判断が可能であり、また検地実施時における役人等の動きを比較的具体的に説明した史料もいくつか残されている。例えば享保10年（1725）刊行の地方書、『勸農固本録』には以下のようにある。

〔史料1〕

（前略）扱①縄奉行ハ惣奉行の勤方も兼、田畑の位、竿の始終出入に気を付、折々継竿歩行様も仕、田畑の中ニ寄合、②上トモ下トモ定へし、又③帳付役一組四人あらは忒人ハ宿二居清帳を認、其外諸用可調、忒人ハ野方江出、竿取何間と呼候時、此方方も高声にて何間と呼、帳二付へし（後略）³⁾ （下線部は筆者、以下同）

「縄奉行」が惣奉行も兼ねて（下線部①）土地の上下（品等）を定める（下線部②）、記録役の「帳付」が4人いる場合は2人が宿で清書等を行い、2人は現地にて「竿取」が間数を言った後に大きな声で呼応して帳面に付ける、などとある（下線部③）。縄奉行・帳付・竿取の役割を記したものである。

また信濃国での検地の記録、天保5年（1834）「検地仕法」には検地の図が描かれると共に下記の説明文がある。

〔史料2〕

（前略）右図之如く当時立毛之中ニ候得者、甚通路悪敷、①サイミト云、七、八尺程有之竹の先へわらを結付、畑の四方へ建、其間ニ四方へぼんでんを建、夫方縄を十文字ニ張、三方ニ而四方をため、細見・ぼんでんを真直に見通す、夫方縄の十文字ニなり候処へ、老人立居、十字を入る、此十字（*図が記載）如此文字之内みぞをつき、縄の十文字へはいり侯様ニ致す、

②如何様成まがり畑にても四角ニ見込直ス、右十字真直ニ入候得者、四方長短有之候共、角ニ成ル、畑毎村役人帳面ニ記し置、絵図面共時之、持主も罷出居、③夫方御役人大音にて元分と御呼被成るゝ、読人大音にて字何、何十何番、原畑何畝歩、見付何畝歩、是を上見付となへるかな、見付を下見付と云、何村何右衛門と読、夫を御書留被成候而、十字の縄の先へ御廻り、縄引に声をかけさせ、ひつぱる、御役人の杖に寸尺を記し置、④長と呼ハ長と答、何十何間何尺何寸と読、三方之御役人御書留読合スと答、其事こと又ハウけたり杯と云、尤村役人も其通り記し置、御奉行ハ右縄張の畑くろに床机を直し、腰をかけ、御覽被成るゝ（後略）⁴⁾

史料2では、竹の先へ藁を付けた「サイミ（細見）」を畑の四方へ立て、その間に「ぼんでん（梵天）」を立てて縄を十字に張ること、そして細見と梵天を真っ直ぐにして十字木の溝に縄が入るようにすることが記される（下線部①）。「如何様成まがり畑にても四角ニ見込直ス」（下線部②）すなわちどのような形の畑であっても四角に見込むともある。必ず四角形（長方形）にするという手順である。役人の声かけについても記載がある。「大音」すなわち大きな声で字や地番等を言い（下線部③）、縄を引いた際には「長（なが）」と声を掛け合って長さを読み合わせるという流れである（下線部④）。

以上が検地役人の動きであるが、彼らが現地でどのような判断をして、いかに正確に素早く四角を見立てていくのかといった点については具体的には不明である。宝暦13年（1763）成立の地方書『地方落穂集』には、竿取は熟練者であり竿の入れ方には口伝がある、と記されるように⁵⁾、判断は担当役人の経験や技量によるところも大きく、口伝でしかない部分もあったのだろう。2018年度からの実践でも長方形の見立ては容易ではなかったが、この見立ての作業をできるだけ迅速にする方法を検討することが必要といえる。

(2)1日あたりの検地の数

検地帳に記載される土地の数は村の規模によって様々であるが、多くの土地を対象として、数日間かけて実施されるのが一般的な検地である。茨城県内に残る検地帳の中には、検地実施日ごとに書き上げたと考えられる検地帳も存在する。1日の検地の数を判断できる検地帳として、慶長7年（1602）常陸国河内郡東条庄古渡村（現茨城県稲敷市）の検地帳がある⁶⁾。一連の検地帳は7冊、8月14日から20日まで1日1冊作成されたと考えられるものである。土地の数は、14日130筆、15日246筆、16日234筆、17日203筆、18日229筆、19日65筆、20日171筆である。

寛永18年（1641）の常陸国茨城郡上伊勢畑村（現茨城県常陸大宮市）の検地帳も日毎の帳簿となっている⁷⁾。この検地帳には1月20日から27日の8日分が記され、各日の土地の数は、20日303筆、21日161筆、22日257筆、23日134筆、24日312筆、25日272筆、26日247筆、27日316筆である。この検地帳に記載された1筆ごとの間数について、例として22日を平均すると、おおよそ縦13間、横9間となる。かなり大雑把に言えば、20m四方の土地を1日に200～300程度、検地していたということになる。この数は1日で実施できるものであろうか。検地帳の日付は帳簿の清書の日付に過ぎないのか、あるいは実際の1日の検地の数なのか、土地1枚あたりの検地の所要時間を含めた検証が必要となる。

2. 検地の実践

(1)実践の準備

上記を踏まえ、より広くまた多くの土地でどのくらいの所要時間によって検地が可能であるのかを検証するため、農学部国際フィールド農学センターでの検地を計画した。これまでとは異なり、迅速に長方形を判断する方法での実践となるため、実践者と事前に数日をかけて、大学構内にて方法の検討、手順の確認を繰り返し行った。

今回は奉行や十字木に統括的な役割を持たせるのではなく、細見竹や梵天竹など一見すると目印にしすぎないと思われた役割も、各々が自身の位置に加えて、対面するあるいは隣り合う地点の位置を確認することを特に意識した。細見竹・梵天竹にはその要具自体に意味があったと考えられるためである。これまでの実践ではどうしても地面を注視しがちであったが、それでは細見竹と梵天竹という、別の要具を立てる意味がない。細見竹と梵天竹を立てた上部を目視し、空間において長方形ができているか、中点を取ることができているかを確認するものではなかったか。空間を認識し、四隅とそれぞれの中点を確認して長方形を見立てていくものと考えられるのである。

この点を考慮し、実践者はそれぞれに声掛けをしながら全員で長方形および各辺の中点を見立てることを心掛けることとした。大学構内ではカラーコーンを四隅に設置して四角形を作り、細見竹が過不足を考慮して長方形と想定できる位置に付く、梵天竹はほぼ同時に細見竹が想定した辺の中点に立つ、その際、隣り合う細見竹同士、向かい合う梵天竹同士で位置の確認をし、ずれがないように声掛けを行う、という流れとした。

繰り返し確認をしていく中で、短時間で検地をする場合、検地役人は「走った」のか?という疑問も生まれた。また総奉行からの声掛けを含めた当時の「言葉」はどのようなものだったのかなどの疑問もある。今後のさらなる検討分野の広がりが感じられた。

なお製作した水縄の長さが 24 間であったため、それ以上の長さがある広い土地は区画をして進めていくことになり、この点も想定して練習を繰り返した。合わせて要具の調整も行った。



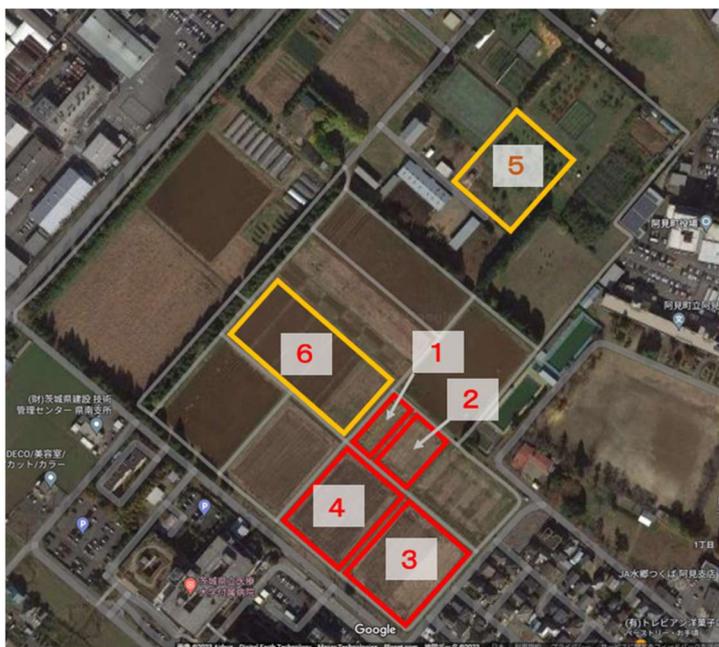
大学構内での練習



用具の調整

(2)実践当日

2023年3月17日、農学部国際フィールド農学センターで検地を実施した。実施地点は図1で示した6地点である。これら6つの地点をそれぞれ複数に区画, 1区画を土地1枚として番号を付し, 6地点で合計41枚の検地を実施した。



地点1 (田) : 3枚
地点2 (田) : 4枚
地点3 (田) : 6枚
地点4 (田) : 6枚
地点5 (畑) : 10枚
* 果樹+牛の牧草地
地点6 (畑) : 12枚
→合計41枚

図1 検地地点と区画数 *Google マップより作成

事前に検地可能な地点や各地点の土地の状態等は確認していたが, 区画自体は当日, 各地点の検地前に行った。水縄の長さが最長24間であるため, まずカラーコーンを用いて土地の区画を決め, 検地の順番となる地番を決めて開始した。事前の練習を踏まえ, 実践は下記の手順で実施した。

[検地の手順]

- ①各地点を区分けし, カラーコーンを置く。
- ②検地の順番を決める (地点の区画番号順とする)。
- ③総奉行の「1番始め」の発声で役割がそれぞれの位置につく。
- ④細見竹が四隅に付く。長方形となる位置を決める。細見竹同士で場所を確認する。
- ⑤④の動作とほぼ同時に梵天竹が各辺の midpoint に立つ。梵天竹同士で場所を確認する。
- ⑥⑤と共に水縄が梵天竹の場所に移動し, 十字になるように縄を引っ張る。
- ⑦十字木に縄を入れ調整, 確認。
- ⑧間竿が縦 (または横) の間数を数えて唱え, 帳付が復唱。
(間竿「長」→帳付「長」, 間竿「〇間」→帳付「〇間」)
- ⑨続けて間竿が横 (または縦) の間数を数えて唱え, 帳付が復唱の後「承り」で終了。
(間竿「△間」→帳付「△間, 「承り」)
- ⑩タイムキーパーが所要時間を報告。
- ⑪総奉行が「2番始め」と指示し, 次の土地へ移動。以後, 地番順に④～⑪を繰り返す。



梵天竹と水縄（水縄は互いに強く引く）

④の位置取りは特に重要であり、そして④⑤⑥はほぼ同時進行となるように各自で立ち位置を定め、さらにお互いの位置取りについても確認、調整していった。また水縄はたるみのないよう強く張ることが必要であるため、縄の持ち手が互いに声掛けをしながら強く引くようにした。

以上の手順によって、まず地点1から4までを実施した。事前の練習や声掛けの効果もあって順調に進めることができた。

次の地点5は牛の牧草地であり、低木が並ぶと共に鉄線が張られているなどで、区画そのものに苦慮する場所であった。また樹木を避けながらの実践でもあった。しかしながら、検地自体は順調であったといえる。

順調に進めることができたため、実践者からの要望もあって地点6の検地を続けて実施した。柔らかい土で歩きにくく、また今回の実践で最も広い場所であるものの、形を把握しやすいこともあって、こちらも順調に進めることができたといえよう。



地点5での検地のようす（樹木を避けながら行う）

3. 実践の結果

(1)間数および所要時間

6つの地点、合計41区画の検地の結果は表1の通りである。各区画の縦・横の間数および所要時間を一覧とした。ほぼ2分以内で実施できていることがわかる。地点6はかなり柔らかい土地で歩きにくいなど、各地点で土壌の違いはあったものの、本実践によって、おおむね25間四方内であれば、1～2分での検地が可能であることが検証できた。

単純に計算すれば1時間に30枚の田畑の検地が、すなわち1日で300枚の検地も不可能ではないという計算になる。実際の全村検地は、作付時期を避けて実施されたと考えられ、冬季であれば日の出から日の入りまでの時間も短く、また検地役人の体力の問題なども含めて、まだいくつか考慮すべき点はある。

表1 計測地の間数および所要時間

地点No.	地番	縦 (間)	横 (間)	時間 (分:秒)
1	1	8.5	5	1:05
	2	9	5	0:37
	3	11	5.5	0:42
2	1	13.5	12.5	1:25
	2	13.5	13.5	1:50
	3	14.5	15.5	1:35
	4	14.5	12	1:17
3 ・ 4	1	18	15	1:45
	2	18.5	15	1:28
	3	18.5	15	1:13
	4	18	14.5	1:59
	5	19.5	15.5	1:26
	6	19.5	14.5	1:24
	7	12.5	22	2:01
	8	11	22	1:19
	9	10	22	1:06
	10	10	23.5	1:41
	11	11	23.5	1:13
	12	11	22.5	1:53
5 6	1	16	4	2:24
	2	15	4	2:50
	3	9.5	15	1:20
	4	8	9.5	1:55
	5	10.5	6.5	1:50
	6	10.5	9	1:20
	7	12	8.5	1:56
	8	11.5	8.5	1:32
	9	11.5	4	1:17
	10	13.5	7	1:31
	1	23.5	12	1:47
	2	24	12	1:20
3	24.5	12	1:19	
4	17	12	1:52	
5	17	12.5	1:27	
6	17	10.5	1:13	
7	18	10.5	1:23	
8	18	12.5	1:10	
9	18	12	1:01	
10	13	12	1:12	
11	13.5	12	1:02	
12	13.5	11	1:03	

各地点での検地の詳細については、例として図2（地点3）と図3（地点5）で示した。図は各区画を便宜的に長方形等で示しているが、実際には長短さまざまで土地の形は一樣ではない。地点3は6つの区画に分けて、時計回りに検地を実施している。さらに地点4まで含めて12区画を連続して実施したものである。

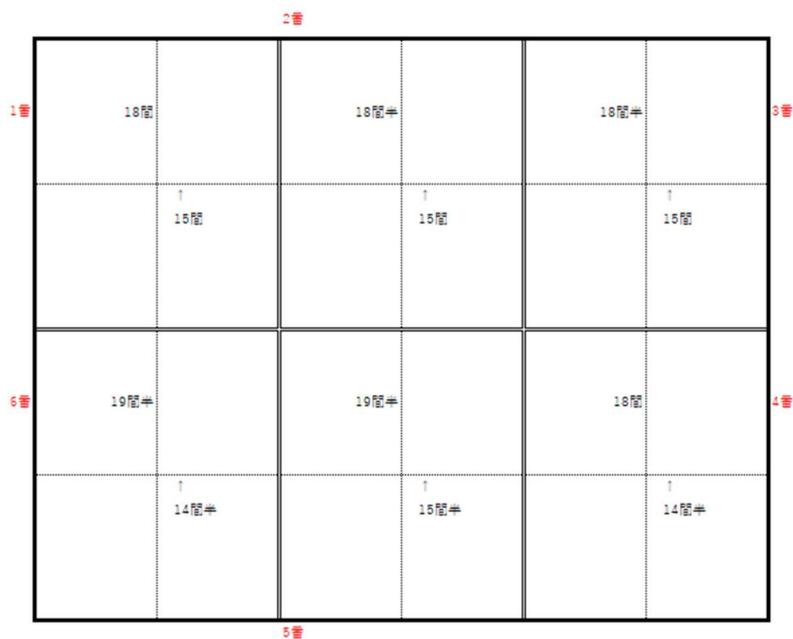


図2 地点3の区画と間数

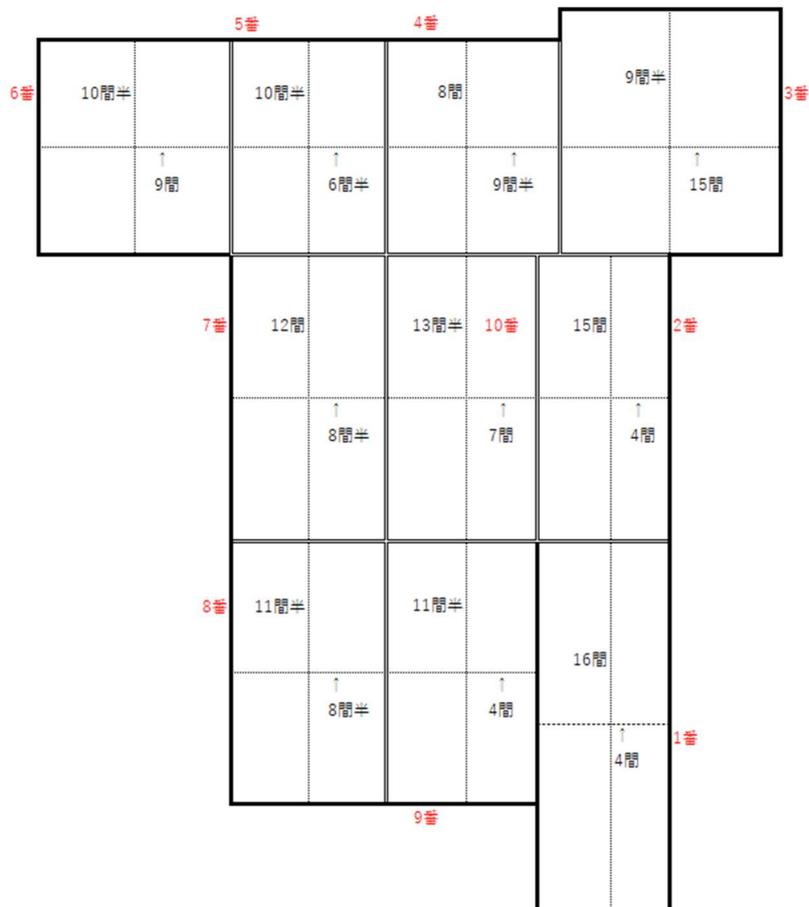


図3 地点5の区画と間数

地点5は区画に手間取った場所である。図3に示した通り、右下を1番とし反時計回りに、地点5の真中を最後として実施した。区画した土地の形が一樣ではなく、また樹木を避けるなどしながらの検地となった。区画を定めることができれば、あとは検地を進めるのみであるため、地番1・2を除けば1～2分で実施ができている。事前の区画設定ができていれば、検地自体の時間はそれほど要しないことがわかる。

(2)面積

6つの地点について、検地で算出した面積とGoogleマップによって算出した面積の数値を比較すると下記ようになる(地点5は範囲が異なるため参考値)。地点1と地点2は合算して、検地では29.6a、Googleマップでは31.9aであった。検地は1間=180cm、1歩=3.3㎡として算出したものであるため、実測と誤差があることを勘案すれば、全体として実測値に近い数値が算出できたといえようか。

表2 計測面積の比較

*単位：a(アール)

	地点1	地点2	地点3	地点4	地点5	地点6
検地面積	4.9+24.7=29.6		54.8	48.8	27.9(一部)	84.3
Googleマップ面積	31.9		56.9	49	*66.8(全体)	87.5

*「Googleマップ面積」の計算は齋藤修特命教授による。

(3)検地に要する人数

今回の方法で検地を実施する場合、細見竹4名・梵天竹4名・水縄4名・十字木1名・間竿1名・帳付1名の計15名の作業が必要となる。例えば向かい合う梵天竹のうち、一方が水縄も持つようにすることで人数を減らすことも可能ではあるが、水縄は互いに強く引く必要もある。また実践では総奉行が帳付を兼ねる、十字木を兼ねることもあったが、人数はできるだけ多い方が望ましいと考えられる。

なお『勸農固本録』には、「帳付」は読み書き計算が達者で根気強い40歳以下が良いとあり、「竿取」は20から30歳まで、元気で律儀な者が良いと記されている⁸⁾。1日中の作業を数日間かけて実施するものであり、一定数を要する人数に加えて、現地では相当な体力が必要であったことが推察されよう。

4. 実践の感想

実践者からの感想は以下の通りである。これまでとは異なる方法での実践で手ごたえを感じたようであり、今回も直接の声として興味深い内容が得られた。今後の検討や改善につなげていく予定である。

○今回の実践では、過去の実践と比較して、検地の速さというところに重点をおいて行った。その結果は非常に有意義なもので、飛躍的に多くの田畑の枚数を調べることができた。これにより、検地帳に書かれていることに近い状況を再現することができた。

今回の実践で個人的に感じたことは、検地のやり方などに関して、批判的に考えるという場面が増えたということである。そもそも、前回までの実践は、やり方を覚える、正確に測るので精いっぱい、考えが深化していかなかった。今回は、あの絵図は本当にあったのか、最初の1筆だけ丁寧に行ったのではないかと考える事ができた。また、検地帳の筆数についても疑問を持つことができ、さらに考えを深めていくことができた。これらのことより、歴史は解釈であり、この楽しさこそが歴史の楽しさであると感じた。

また、地域によって土地の測定がどのように行われていたのかを調べる事にも興味が湧いた。日本国内の違いやヨーロッパ、アフリカなど様々な地域のどれが一番効率が良いのかなど、様々な展開があると考えた。教科横断的な視点で考えると、検地は体力的な面が重要であって、武士は走るのか？や検地役人に求められる身体的発達とはどのようなことであるかなど、様々な問いが立てられると考えた。検地役人の構造的な衣服で考えれば家庭科、字を書くというところでは国語科など、様々な横断の形があると考えた。

今回の実践は自分のなかで、非常に学びが多かった。今後どのようにこのプロジェクトが発展していくのが非常に楽しみである。個人的な希望としては、教材化が達成されるように、考えを深めていきたい。
(松本大輝)

○今回の検地を通して、仮説を立てた後に検証を行うことの重要性について再認識することが出来た。記録で見られた、一日につき100枚以上の田畑の検地は、実際に練習や検証を行うまで、自分たちには不可能ではと考えていた。しかし、今回検証した方法では、これらの記録は思ったよりも妥当なものであり、役人らに高度な技術があったことや、同時に複数の検地が実施されることによってもたらされたものではないことがわかった。このような気づきは、史料の検討だけでは得られなかったことである。

また今回は四角形の測量については、台形や歪な四角形について十分な成果を出すことが出来たように感じる。その一方で、五角形以上の多角形や円形などの複雑な図形についてはその測量法を確立出来ていない。多角形の測量ではこれまでと異なり、頂点に細見を配置するだけでは人数が足りない上、それだけでは長方形を作ることが出来ない。事前の区画割り等の対応、もしくは面積の過少を考慮し、四角形として面積を算出する必要がある。また、円形ではそもそも頂点が存在しない。これらの場合の測量法についても検討の余地が残ると言える。
(高野啓介)

○今回の検地については、前回と少し異なった方法で実践するとともに、事前準備を数日かけて行ったことで、よりスムーズなペースで検地を行うことができたと思う。過去の史料等を踏まえても、現時点で、今回の検地方法が当時の測り方に最も近い方法なのではないかと考える。また、この経験を通して、実践前の土地の区分けが特に重要であると感じた。今回、検地対象の土地が広大であったことから、土地の区分けにかなりの時間がかかった。次回は、カラーコーンや杭等の数を増やし、実践前に全ての土地を区分けしてから検地を行いたい。これにより、一日に何枚の田が測れ

るのか、一枚どのくらいのペースで測れるのかがより明確になると思う。また、今回の土地は長方形のものが多く、複雑な形をした田畑は想像より少なかった。今回の実践場所以外でも検地を行い、様々な形・大きさの土地を測ってみたい。(宇野伶香)

○今回は5年目の実践とあり、練習期間などを設け、より長い時間検地と向き合うことができた。メンバーで様々試行錯誤していく中で感じたことは主に3点ある。

1 点目は、人任せにせず、どの役職をする者も考えて行動する必要があることだ。特に最初に四角形を微調整する必要がある細見は、互いに距離や空間を把握しながら最適な位置を見つける必要がある。当然、梵天や十字なども協力しながら確認し合うことが求められることが分かった。

2 点目は、広大な面積を計測するとなると、縄を張らなくてはならない水縄の負担が大きいことだ。梵天担当の者にも協力してもらい、2人がかりで縄を張ったが、時間などを区切りとして役職をローテーションすることも大切と感じた。

3 点目は、思ったよりも早いペースで検地を行えたことだ。実践においても、1枚当たり1分30秒～2分程度で終わることができており、当時のペース同様に行えていたと思う。ただ、後半になると疲労や単純作業からか、集中力が落ちやすいと感じた。

課題としては、掛け声や移動の仕方なども挙げられるが、今回は役人目線でしか検地ができず、客観性が乏しくなってしまった。百姓側の立場からすると、今回の検地はどのように感じたのか、検地を評価する外側の視点が今後の課題のように感じた。(小林未知)

○検地実践は3回目の参加となったが、今回の実践は過去回と比較しても完成度が高く、様々な面で新たな収穫が多いものだったと思う。例えば、検地帳の記述から当時の検地は1日300筆と手早く行われていたことや、事前練習を充分行うことで測量スピードが例年と比べられないほど早くなったこと、2年前は測量出来なかった菱形をほとんど誤差なく測量できたことがあげられる。

このようにある程度検地の仕様を把握出来たことを踏まえると、次回以降は午前中に田畑の区画を設定し、午後の時間を通して検地することで、1日あたりの活動時間や他にも検地しているチームがあったのか等、今回生まれた疑問について考察できると考える。(鈴木孝明)

○今回の検地に限らず、歴史の用語は教科書に出てくる文字として覚える場合がほとんどだと思う。しかし実際の活動を通して、歴史事象をより深く印象的に学べることを再認識できた一週間だった。

また、思考と実践を繰り返すことで、多くの発見を得られたことも印象深い。当初は「十字木」の役割が最も重要だと考えていた。しかし、活動の中で「細見・梵天」の正確性や連携によって、検地の精度や速度が大きく影響を受けた点が、特に印象に残った。

今後は着物や草履など衣服を準備することに加えて、あらかじめ区画された土地をタイムアタック形式で測量するなど、より当時に近い検地が実践できるように思考と実践を繰り返していきたい。(生井雅久)

○今回で検地実践への参加は2回目になったが、前回と大きく違う部分は、明らかに実践する土地の規模が違うということだった。しかし、練習の時を含めて意外と検地をする時間はかからないの

かなというのが正直な感想だった。もちろん足場が安定しないところで、動きながら面積を計測する、それを繰り返すというのは身体への負担が大きいとは思う。しかしその環境であったり、計測方法について、コツをつかんでしまえば意外と負担感なくやれるのかなということが分かった。

一方で計測の際、細見を見るときに上の部分ではなく、持っている人や下の部分を見てしまったのは、時間ロスや正確な位置を把握するのに苦戦してしまった部分ではないかと思う。長さを図るところについても、もう少しコミュニケーションをとれると混乱せずに早く測れると思う。加えて、長さを測る動作に移るときに、各辺の midpoint に立っている人が真ん中までの距離を目安で測っておくのも、整合性を取ることや把握までの時間を短縮する一つの方法になってくるのではないかと思った。その部分も含めて次の実践の時に反映していければと思う。(佐々木秀丸)

○今までは検地という言葉は知っていても、どのように行っていたかまでは知らなかったもので、今回の検地の実践を通して、検地に関する知識を深めることができた。数日前からシミュレーションを重ねたことで、当日は各々がどのように動くかを理解した上で行動することができたのではないかと思う。検地自体はシミュレーション通りに短時間で言うことができたが、耕地を分ける作業に時間がかかっていたので、次回は事前にどのように耕地を分けるかも考えた上で、検地の実践を行うと、より多くの耕地を測ることができるのではないかと思った。また、ドローンの映像を見た時に、上から見ると、各々がどのように動いているかがより鮮明に分かったもので、今回の検地の実践や授業などで検地の内容を扱う時に、その映像を参考資料として活用できるのではないかと感じた。

(中泉佳歩)

○今回は実際に江戸時代に使われていた道具を使って同じ手法で検地を行った。1週間かけて準備や練習を行ったので、当日は全体的にスムーズに計測を行うことができていたと感じた。また当初は古文書に記録されているような量の検地を行うのは難しいのではないかと考えていたが、我々でも練習すれば1回の計測を1分強ほどで行うことが可能であったので、古文書の記録も間違いではないのではないかと思った。また実際に農地に行ってみると台形などの複雑な形は少なく長い四角形が多かった印象である。そのため当初は細見の位置取りが難しいポイントだと思っていたが、長い場所の midpoint をとる梵天の方が難しいと実践を通して感じた。また水縄を引く作業がやはり縄の張りを維持するのに体力を必要とした。今回の検地を通して江戸時代の作業について深く考えることができた。次回の検地にも参加したいと思う。(大塚涼馬)

○実際に検地をやってみて、予想では不可能だと思っていた田畑の枚数も意外と現実的だったのではないかという予想外の結果を得られてよかったと思っている。去年は2枚しか測れなかったという話だったが、今回は40枚以上測ることができた。これは大きな進歩だと思ったが、もっと段取り良く測ることができるのではないかと思った。特に今回は、木が障害物となっていて水縄の移動に時間がかかってしまった。またそれ以前に土地をはかりやすいように分割することに時間を割きすぎたのではないかと思った。これらを改善するための案や工夫がやっている最中にいくつか見えてきたので今後の活動に活かしていきたいと思った。(篠崎亮介)

○実際に検地を再現してみるという活動はとても楽しかった。ただ検地の方法を真似してみるだけではなく、どのようにやっていたか、どのような掛け声をかけていたか、どのくらいの精度でやっていたのかなど細かい部分を考えながら、実際にやってみることで推測することができたところも面白く、良い研究になると思った。特に検地の際に武士が歩いたのかそれとも走ったのかは私も気になった。江戸時代の検地の際に使われた履物などがあればそれを真似たものを作り、実際に使用してその履物につく細かい跡を見ることで、歩いたときと走ったときのどちらの跡が実際のものに近いかを確認できたりするのかなと思う。また機会があれば参加させて顶きたい。(坪佑翼)

○私は初めての検地であったが、とても楽しく学びも多き活動であった。細見や梵天、水縄など当時の検地で実際に使った道具を作成したり、検地帳を読んでどのように検地を行っていたのかを確認したりする活動を通して感じたのは、実際に行ってみないと分からないこともあるということだ。私は最初1日に200～300枚の検地を行っている過去の記録に対して、実現は非常に難しいと思っていたが、実施を繰り返し、より効率化した結果、ある程度現実的な数値であることが分かった。また活動を続ける中で、新たな疑問も生まれてきた。このように歴史を理解するには、当時を再現しながら活動することも大切であることを痛感した。それだけではなく、先輩方や千葉先生のおかげもあり、全体を通してとても楽しく活動できたので、次回の検地実践も機会があればぜひ参加したと思う。(濱野寛之)

おわりに

本実践では、検地の方法を再検討した結果、より広く多くの土地を短時間で進めていくことができた。単純計算では1日に200～300枚の検地が可能という結論を出すこともできるが、検地が可能時間帯や検地役人の体力の問題等を考えていく必要もあろう。また地番の確定を含めて、検地の前日までに準備を整え、検地当日は計測のみを迅速に行ったと考えられるため、今後はより近世当時に近い方法によって検地を進めていくことが必要と考える。

今回の実践を踏まえ、さらに近世の検地の再現を進めると共に、学校教育における活用のあり方についても、引き続き検証と考察を進めていきたいと考える。

*本実践に際しては準備段階また実践当日を含めて多くの方々にご協力をいただきました。農学部国際フィールド農学センターでの農地使用のご快諾をいただいた佐藤達雄所長、準備段階から細やかなご協力をいただいた高田圭太氏そして農学センターのみなさま、ドローン撮影では工学部の齋藤修特命教授、小曾納久男氏、廣瀬清一氏、そして本実践の実現のためにさまざまな方々を繋いでいただいた大学広報室の山崎一希氏にも大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

*本実践は茨城大学HPにも掲載されました。

茨城大学 HP (2023年4月26日掲載) -NEWS-REPORT- 「【動画あり】教育学部社会選修の「検地」再現 今回は農学部の附属農場でチャレンジ！」

<https://www.ibaraki.ac.jp/news/2023/04/26011962.html>

注

- 1) 千葉真由美・吉井豊・大西有「歴史教育における数学的知識の活用―検地の実践から―」(『茨城大学教育実践研究』第38号, 2019年, 1-10), 千葉真由美・平山稜・矢野圭太郎「歴史事象の多角的理解に向けた検地要具の製作」(『茨城大学教育実践研究』第39号, 2020年, 15-27) および 千葉真由美「歴史教育における数学的知識の活用2―制作要具を使用した検地の実践から―」(『茨城大学教育実践研究』第40号, 2021年, 1-13).
- 2) 安藤博編『徳川幕府県治要略』(柏書房, 1971年).
- 3) 享保10年(1725)刊『勸農固本録下』(国立国会図書館デジタルコレクション, 請求記号特1-264).
- 4) 天保5年(1834)「検地仕法」(NPO長野県図書館等協働機構/信州地域史料アーカイブ掲載画像より).
- 5) 『地方落穂集』(滝本誠一編『日本経済大典』第24巻, 史誌出版社, 1929年).
- 6) 安政5年(1858)1月「慶長七寅御検地帳写」(永長栄三郎家文書).
- 7) 寛永18年(1641)9月「常州茨城郡上伊勢畑村御検地帳」(上伊勢畑区有文書1・2).
- 8) 前掲注3).